
我ガ働哭ハ、拳ト成リテ

南部 樋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が慟哭八、拳ト成リテ

【Nコード】

N7490Y

【作者名】

南部 樋

【あらすじ】

神官殺しで奴隷闘士となったヴァルトは、この日ついに自由を勝ち取る事ができた。

奴隷闘士となってから五年……久し振りの自由の身となった時、ヴァルトは闘技場では敵無しの【拳帝】と呼ばれるようにすらなっていた。

しかし、遠い昔に失ってしまった家族への憧れや、憤りは衰えるどころか、神への憎悪へと変貌していた。

【拳帝】 【不死者】 e t cと数々の異名を持つ。男が織り成す人

間模様が今ここに開幕！

ヴァルトは自由の中で“何を目指し” “何を成すのか” 握った拳
では何も掴めない事が解らぬまま……

自由を掴む拳

石畳を乱暴に擦る男の硬い足音だけが、陽の当たらぬ通路内で反響する。

外界へと続く薄暗い通路の終点は明るい。歩を進めるにつれ、徐々に視界が光で白く染められてゆくのが分かった。そのまま、光が満ちる方向へと真っ直ぐに向かう。

男の足取りは薄闇に名残を残すかのように、ゆっくりとしたものだった。反面、薄闇に決別を告げるハッキリとした男の意志が、力強く踏みしめる一步一步から見て取れた。

そして……遂に、太陽の陽射しが指す世界へと男の大きな足が一步踏み出された。

舗装された石畳の質が変わり、足裏から伝わる感触にも若干の違和感を覚える。それは長い年月に渡って男が追い求めていた、懐かしい感触だった。

男の顔に浮かんでいた、薄暗い闇を惜しむような表情は既に消えている。実際は、徐々に視界を覆う陽の光に眼が慣れず、細めていただけに過ぎなかったのだが……男は自分でも知らないうちに、感慨に浸っていたのかもしれない。

突然、風が吹いて男の顔を優しく撫でる。

風を感じる機会は当然ながらこれまで何度もあった。だが最後に“外”で感じたのは、何年前だったろうか。

数年振りに“外”で浴びた太陽の光——否、自由の光を全身で謳歌するように……男は悠々とした動作で大きく伸びをした。

「よう！ 拳帝様、アンタがここから出て行っちゃまうと、俺の懷が寂しくなるなあ」

唐突に背後から声が掛かる。男は声のする方向へ視線を向ける事無く、耳を僅かに動かすだけだった。

“外”の感触を肌で感じ取る男の様子を見て、暫くは口を出さなかったのだらう。

男が出てきた通路の入り口を固めるように、二人の兵士が立っていた。話し掛けたのはその片方で、男の大きな背中に向け、おどけた口調で言葉を続けた。

「あんたのお陰で、こっちは随分と儲けさせてもらったからな。正直、また別の力強い奴を見つけて賭ける位なら、賭場にも行つて博打でも打った方がマシつてもんだ」

「はっ！ そんな事をすりゃ……暖かい懷も冬を待たずして、チエドラ山の山頂並みに寒くなるさ。あんた、博打が恐ろしく下手そうな顔だからな？」

「言つてろ！ なあ、ここだけの話……いつでも帰つてこいよ？ 勿論、また奴隷としてだけどな！」

いくら話しかけられようが、男は決して振り返えない。

前だけを向いたまま、意地の悪い笑みを浮かべると兵士に言葉を返した。

「そんな時は、あんたの懷に氷をぶち込むためだけに雑魚に殺されてやるよ」

男が発した言葉が余程気に入ったのか……、二人分の盛大な笑い

声は、男が今しがた出た通路にまで響き渡った。

「じゃあな！ 拳帝。アンタに“神の祝福があらん事を”ってな」
「ははっ！ 神か……神なんて……」

突如、轟音が鳴り響く。

男が続けざまに言い放った言葉は遮られ、兵士の耳元に届くことは無かった。

轟音の正体は、男が通路から出たのを見計らって降ろされた鉄格子の音だ。見るだけで相手を威圧するような重い鉄格子が派手な音を立てて、入り口を閉ざす。

それは、まるで——長年閉ざされた空間で、生き延びてきた男の頑なに閉ざされた心を代弁するかのようでもあった。

「おい、最後なんて言ったんだ？」

兵士は閉まる鉄格子に邪魔をされて、聞こえなかった続きを男に促す。だが男の口は、二度と同じ言葉を告げはしない。

ただ静かに、そして豪快に……

己の生と自由を勝ち取った、唯一無二の証である掌を振って答えるのみだった。

(1-1) 歓声を招く拳

速めるわけでも、遅らせるわけでも無く――。

男は大通りに入った後も、闘技場を出た時と同じ速度を保ったまま堂々たる足取りで闊歩していた。

きよろきよろと見回すような無粋な真似をしなくとも、様々な情景は目に入る。

王都・アリユテーマの中心に位置する闘技場は、古来からの建築様式で用いられていた石造りだった。だが、一步踏み出すと周囲は煉瓦造りの建物が連なっている。

舗装がなされ、馬車や荷車が行き来し易いように石畳の凹凸も少ない。これが一筋裏道へと入れば状況も違うのだろうが、良い道にはより多くの人々が集まる。男が足を踏み入れたばかりの大通りも例外では無く、道端に所狭しと露店が並び活気が満ち溢れていた。

闘技場から開放されたばかりの男は知る由も無かったが、今日は月に一度の市が立つ日であったことも原因だった。

近隣の村からもこの日ばかりは街へと赴き、商人を介さず売買を行う事が許されている特別な日である。従ってその賑やかさは、普段以上のものであった。

必死に値引き交渉をしていた者。

いい品を求め露店をうろつく者。

客の懷から出来る限りの金を搾り出そうとする商人。

隙だらけの田舎者から財布を掏ろうとしていたスリ。

酔って機嫌良く歌う酔っ払い。

それぞれが市の喧騒に取り込まれ、各々の成す役割をこなす者達ばかりであったが——大通りに突如現れた大柄な男が目に入ると、彼らは無意識のうちに言葉を嚥む。そして、自然と視線で男の姿を追ってしまっていた。

伸ばし放題の赤毛に、これもまた伸びきった髭を蓄えた巨体はかなり目立つ風体だとは男自身も思うが、彼らの関心は風体では無く別のものにあつたらしい。

最初は一人、次に二人、さらには三人……

様々な声に混じり、ぼつりぼつりと数人が男に関する言葉を口にする。

「おい、あれ……拳帝だよな？」

「拳帝が何故ここに……」

「……まさか、今日抜け出たのか？」

「陛下から恩赦を頂いたというのは、本当だったのか？」

「くっそ、アイツの所為で幾ら損をしたと……」

「あいつを殺せば、俺の名前も……」

様々な声が賑やかに飛び交う大通りを進むにつれ、男の顔がみるみるうちに不機嫌な表情へと歪められる。ついには道の往来で、歩みを止め苛立ちを露にした。

雑踏の中、自分へと向けられる視線と言葉を捕らえ、男は顔を顰めて人混みを見つめる。

最初のうちは、男も気には留めなかった。だが……こつも多く視線と言葉を向けられれば、それだけ不快感が顕著に現れる。

——チッ、うざってえ……

心の中で悪態を吐き、男が威圧を込めた眼で人々を一瞥する。

元々男の顔は人受けが良い方では無い。眼付きは悪く体格も人一倍大きい為、黙っていたら機嫌悪く、怒っている様な印象を昔から受ける様な容姿だった。

一度は皆閉口し、それぞれの行うべき行動へと戻る。だが、結局はそれすらも短い間でしかなかった。皆が皆、威圧感にたじろきながらも男に視線を注ぎ続ける。

人々の視線に込められたものは多種多様であった。

興味、畏怖、憧憬、嫉妬。

様々な感情が入り混じっていたが、それぞれが抱いている根源は同じである。

至って単純で、人が人であるが故の感情。――闘技場にて豪腕を振るい、今まで最強を誇っていた男“拳帝”に対する好奇の眼差しであった。

男が立ち止まった為、それまで興味を引かなかった者ですらも男へと視線を向ける。結果、老若男女問わず、無数の視線を浴びる羽目になった。市の勢いも相まって男を中心に氣勢溢る、いかんともしがたい空気が漂う。

――結局、何処に行っても……貴様等が俺を見る目は同じかよ。

熱気の籠もった視線を浴びるにつれ、無意識のうちに現実と過去との去来を繰り返す。

感情を激しく揺さ振られ、男はつい先程まで自分が居た場所――闘技場に立っているかの様な錯覚に襲われた。

命を賭けたやり取りを毎日繰り返すだけの虚しい場所は、五年も過ぎたにも関わらず愛着など抱ける筈も無かった。

既に自由を勝ち取った身としても、好き好んで回想に浸る様な場所では無い。

湧き上がる記憶を持っている自分自身ですら、忌々しく感じてしまつ。あれは愚劣の居城たる場所であり、命を科して過ごした不快な日々だった。

闘技場で男が出場する度、誰もが“その時”を待っていた。

掛け金などは足を向ける些細な要因にしか過ぎない。例えば男に賭けていようと、人々が最後に辿り着く想いは一貫したものだつた。理不尽な暴力と殺戮を道楽として求める者達の願いは、ただ一つ。

最強と謳われた【拳帝】が敗北する、劇的な瞬間。

それは――男が世に与えられた、生を喪失する瞬間の他無かつた。

“その時”を待ち望み、人々は血走つた目を輝かせる。中央に位置する闘技空間を囲む形で設けられた観客席は、溢れんばかりの熱気で毎日が噎せ返っていた。

訪れる者達にとっては日々の労働に明け暮れ、死んだも同然の目を唯一輝かせる場が闘技場のみなのだろう。

人々は口から汚い言葉を吐きかけ、各々の想いを思うがままに飛ばす。

掛札を握り締め、一発逆転を狙う者などは……中でもとびきり手に負えなかつた。

賭けるのは個人の意思にも関わらず、予想が外れれば理不尽な言葉を喚き散らす。拳句、男が生き残つた事に恨みを乗せ、言葉と共に食い掛けの食べ物を投げつけてきた事も毎日のようにあつた。

決まってそういう輩を黙らせるのは、衛兵でも周囲の人間でも無い。唯一、彼等が黙り込むものと言え——侮蔑の思いを込めて睨んだ、男の視線だけだった。

救いの手を差し伸べる相手もいなければ、心の底から自分を認めてくれる相手も居ない。

檻に囚われる事も無く、他人に枷を嵌められて足掻く事も無く。男にとってあの場に居た人間の全てが、反吐が出る程にまで忌み嫌う存在だった。

一体、どれ程の時間を過去に縛られていたのだろうか？

つい今しがたまで向けられていた、訝しげな言葉から恨み節話。更には剣呑な雰囲気放つ言葉などが次第に収縮していった。

男が訝しげに辺りを見回す。その動作の後に続いたのは……男が全く予期せぬ賛辞の数々だった。

「拳帝！ 拳帝！ おめでとー！」

「くっそ！ よかったな、拳帝！ まんまと生きて抜け出やがって

……俺の金を返せっ！」

「おい！ 俺と勝負しろ！ 俺と！」

中には賛辞とも言えない言動も含まれていたが、言葉の調子は共通して明るいものだ。

【拳帝】の自由を祝う言葉がみると周囲の人間へと伝染してゆき——、気付けば割れんばかりの歓声が、公共市場となっている大通りを揺らしていた。

闘技場の中で受けたものとは異なる歓声に包まれ、男は細い目をさらに細める。表情こそ変えないものの、男には思考が追いつくまでの時間が暫く必要となっていた。

——成る程、これが“自由”ってやつか。

五年間もの歳月の中、憧れては憎んだ形の無いモノを遂に得た。という実感が今更ながら胸中に湧き上がる。

そうだ、俺は自由になったのだ。

奴隸身分から解放されて、今日から立派な一市民だ。

最下級の下等市民権だろうが、知ったことが。

誰に憚る必要があるというのだ？

男は自分自身へと数度言い聞かせ、大きく息を吸う。肺一杯に新鮮な“外”の空気を満たした後には、立ち止まっていることすら馬鹿らしく思えてきた。

知らず知らずのうちに口端が上がり、不敵な笑みが浮かぶ。

男は粗末な麻布で織られた服の上からでも判るほどの、鍛え抜かれ盛り上がった胸板を張る。腕に馴染んだ鋼鉄製の籠手ごと大きく腕を揺らし、再び道の真ん中を堂々と歩き出した。

歩き始めてすぐさま、押し寄せる波の如く集まった群衆に男は取り囲まれた。それでも関係無いとばかりに、男は足を動かし続ける。

各種色とりどりの歓声は既に爆音と化し、男の鼓膜を激しく刺激する。

男は負けじと声を張り上げ、足を止める事無く大声で叫んだ。

「うるせえぞ！ この馬鹿野郎どもがッ！ 寄って集って人様の鼓膜を破る気か！

おい、よく聞けクソ野郎共！ 今日俺が自由を勝ち取った素晴らしき日よ！ 俺に言葉を向ける位なら、もつと盛大に馬鹿をやれ！ 商人は破格で売れ！ 客はケチらず、そいつらから気持ち良く買え！ 他の集った連中は飲んで歌え！ 俺の解放記念日だ！ 俺が認めてやる！ 売って買って……何でもいいから騒ぎやがれッ！」

先程の歓声に負けない音量で、男が叫び終える。その頃には、その場に居合わせた全ての人間が男の言葉に聞き惚れ、静寂の時が漂った。しかし、それも僅かな間だけだった。

次の瞬間には――市場全体の熱気が、一瞬にして最高潮にまで沸き上がる。

一瞬にして沸点へと達した市場は、大混乱へと見舞われた。

商人は商品とは全く関係無い拳帝の名前を出し、売りの声を張り上げる。

客は値段も聞かずに即買いの一言を叫ぶ。

市場に居る全員が同じ様に、訳がわからない熱に浮かされたかのように暴走を始めた。

群集を擦り抜ける様にして、男は人混みから離れた場所を目指す。

彼等を嚇けたのは他ならぬ男自身なのだが——、まるで熱狂したかのように騒ぎ立てる観衆の存在は素直に鬱陶しかった。

叩かれたり、身体を触られたり、服を引っ張られたり……

声だけならばまだしも、まるで『触ると御利益がある』と巷で噂される石像の様な扱いをされている事が何よりも気に食わなかったのだ。

余程自分の名を挙げたいのか、中には人混みに紛れナイフで刺し殺そうとしてきた者までいた。ある程度の腕は避けてかわしてゆくも、暴力を向けてくる相手には容赦する必要など無い。男は自分に危害を加えようとする者の手を折ってやる。三人目までは妙な関心を覚えたものの、四人目以降からは何も感じず痛めつけた。

そんな事を暫く繰り返しつつも進むんでいるうち、市の立っている大通りから道を二本ほど外れてしまっていた。相変わらず注目は受けるが、それでも人並みもまばらになっている。

ようやく閑静な場所へと出たと確認した後に、男は短く息と共に悪態を吐いた。

「つたく……うざつてえんだよ！」

朝からまだ何も食べておらず、空腹も相まって苛立ちがより一層募る。

適当に大通りを歩いて目に入った定食屋にでも入ろうと思っていた矢先の出来事だったので、仕方が無いといえば仕方が無いのだが……後悔はしない性分の男も、群集を自ら煽ってしまった今回の件に関しては、流石に少しばかりの反省を覚える結果となった。

——構わず二、三人殴り飛ばして強引に食いに行った方がよかったか……

少々物騒な後悔をしながらも、何か食べる物が売ってそんな場所を求めて男は歩き続ける。

暫く歩いていると、道端の一角で行われていた興味深い光景を捕らえた。男にとって馴染み深い雰囲気放たれており、同時に食欲をそそる匂いも嗅覚が捕らえる。

殺伐とした雰囲気には興味が無かったものの、匂いにつられて自然にそちらの方へと男の足は赴いていた。

「いい加減にしるよ！ このクソジジイ！」

最初に耳へと入ってきた言葉は、余り上品なものでは無かった。

遠目で眺めていた時には既に分かっていたのだが、露店と思わしき場所を挟んで二人の男性と店主らしき初老の男が向き合っている。簡単な木の枠組みで縁取られた店は、これもまた簡単な布で屋根を形成していた。夜になるとこれらを畳み、手間をなるべく省いて移動できる様に造られたものである。

四つ程小さな椅子が置かれており、店主と客を隔てる台の上には何種類かの串に刺さった焼かれる前の肉がそれぞれ皿に盛られている。

見る限りそれは何処にでもある、ごくありふれた軽食を出す露店だった。

闘技場で男が毎日のように聞いていた下品な罵声の類は、どうやら二人組の方が一方的に飛ばしているらしい。素行も当然の事ながら、揃って汚れが目立たない黒地の服を身に纏っているのと、これ見よがしに腰に差している短剣を見る限りは……どう見繕っても、真つ当な職の人間からはかけ離れていた。

「だからよ、誰に断ってココで商売してるんだ？ って言ってるん

だよ！ え？」

「誰に断わる」もあるか！ こっちはキッチンと筋を通して商業ギルドで許可貰って、ここで商売してるんだ。お前達みたいな、ワケの分からん奴等の許可など必要無いわ！」

「何だと？ おいこらジジイ！ もう一回言ってみる！ お前こそ、何の肉だか分からないゴミ肉売ってんじゃ……」

店主に絡んでいた二人組のうち、大声で怒鳴っていた方が唐突に言葉を止めた。脅しめいた文句を最後まで続けることは出来ず、代わりにその身体が僅かに揺れる。

「吼えるな、胃に響く」

短く低い声で、【拳帝】と呼ばれる男は吐き捨てる様に呟いた。

拳帝が男にしたことは至極単純な行動である。

叫ぶ男の肩を左手で強く掴み、飛ばないよう固定する。直後に籠手を嵌めた拳の甲で、間抜けな顔を殴り飛ばしただけのこと。身体を固定されていた為、男はその場で気絶したに過ぎない。簡単に説明してしまえばそれだけのことだが、単純ゆえにその技は脅威に値する。何故なら全ての動作を一動作で、更には殴られた張本人ですら何が起こったのか気付かせず気を失わせる程の早業だったのだ。

そして殴った張本人が手を離すと……男はまるで糸が切れた操り人形のように、地面へと倒れ付した。

店主も二人組の片割れも、一瞬何が起こったのか理解出来ずに茫然とする。そんな彼等の様子などは関係無いとばかりに——拳帝と呼ばれる男は、露店に置かれた椅子へと勢い良く腰を降ろした。

「こいつは美味そうだ。オヤジ、適当に三本程焼いてくれないか？」

腰掛けた椅子の横で倒れている男を踏みつけながら、呆然と立ち尽くしたままの店主へと注文をする。

「け、けっ……け……」

店主は口を開閉しながら言葉を告げようとするものの、余程驚いているのか満足に喋れない。

「け……拳帝、だよな？ あんた」

「おうよ」

驚きで目を見開きつつも、やっと口から飛び出した店主の問い掛けに対し、拳帝は軽く肩を竦め一度だけ返事をした。

「僕はあんたが拳帝って呼ばれる前から、ずっとあんたに賭け続けてたんだ……しかし、他ならぬあんたが食いに来てくれるなんて……待ってる、今焼くから三本と言わず好きなだけ食べていってくれ！」

「いいのか？」

「勿論だとも！」

拳帝の返事を待つ前から、店主は嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。網の上に何本か並べていた串を裏返し、調理台に敷き詰めていた火含石（かがんせき）に水を掛けた。保温も兼ねて温まっていた火含石は水に反応し、さらに熱を発して赤く染まる。

すぐさま漂う肉の焼ける香ばしい匂いが、拳帝の鼻をくすぐった。

「やはり良い匂いだ。口の中に涎が溜まってくる」

「味は任せてくれ！ あんたが“参った”って言うまで焼いてやるよ！」

「ほう、そいつは楽しみだ」

のんびりと世間話でもするかのような口調で店主と会話を交わすが、拳帝の脚は変わらず殴り飛ばした男を踏みつけたままの姿勢である。

踏まれている男と共に店主へと詰め寄っていたもう一人の男はというと……暫くの間は、事の次第を理解出来ず茫然自失となっていた。低く脅す声色で数度声を掛けるも、まるで自分達など眼中に無いとばかりに繰り広げられる拳帝と店主の会話の間には割り込めない。

存在を無視されている事に関して、男の表情には腹立たしさが募る。拳帝の脚に踏まれた連れの口から漏れた呻き声が耳に入り、ついに鬱積された苛立ちは爆発したらしい。男は椅子に腰掛ける拳帝の太い腕を掴んで、大声で捲し立てた。

「さつきから話し掛けてるのに無視とは、いい度胸だてめえ！　よくもバズをつ！」

「……うるさいゴミだと思っていたが、何だ？　貴様等みたいなゴミにもちゃんと名前があつたのか？」

「うるせえ！　奴隷上がりが調子に乗ってんじゃねえぞ！？　ここを誰のシマか知ってモノ言ってるんだろうなあ！」

「知らん。ゴミの臭い唾が肉に飛ぶとメシが不味くなる、黙れ」

「ゴミとは何だ！　もっぺん言ってみろ！　ああ！」

顔を真っ赤にして怒鳴り立てる男に対して、拳帝は何も言葉を返さなかった。代わりに店主が差し出した串を三本受け取り、そのうち一本を口へと運ぶ。

無視をされた男が怒って掴んだ腕に力を込めるが、それをいとも簡単に振りほどき、返事代わりに脚へと力を込める。短く潰れた蛙のような惨めな声が、再び足元から漏れた。

「お、美味しいな」

予想していたものよりも遥かに上質な味に、拳帝は思わず感嘆の声を漏らしてしまう。

店主を脅していた男達は“何の肉だかわからない”と言っていたが、それは極々ありふれた塩が振りかけられた鶏肉だった。表面の皮はパリッと焼かれ、油が充分にのつた鶏肉を噛めば肉汁が口一杯に広がる。

奴隷身分の時に肉を味わえたのは週一回、管理する役人が独断で指定した日のみであった。それでも、最低限の肉体と栄養を保たなければ『観客に対して見栄えが悪い』という馬鹿げた理由からである。大抵与えられたのは――働けなくなつた農耕牛か、駄馬の肉が精々だ。それこそ、何の肉だかわからない代物である。

久しぶりに味わう濃厚な味に、拳帝は目を細めて味を楽しんだ。

一方、再び無視をされた男にはそんな拳帝の気持ちなど到底知る由も無い。相も変わらず無粋な大声を発し続ける。

「俺達を散々コケにしやがって……！　いいか、てめえは奴隷だったから知らないだろうが、ここはなあ！　俺達アルギニン一家の……」

「おいゴミ、食事の邪魔だ。静かにしろ」

「ゴミじゃねえ！」

最後の警告を含めた拳帝の一言ですら、男は真意に気付かない。ついには腰に吊るしていた短剣に手を伸ばした。だが即座に抜ける位置にへと吊るしていたにも関わらず、男が短剣の柄を手にするよりも速く拳帝が動く。

「怒りつぱくなるのは腹が減っている証拠だな。こいつは俺の奢りだ……食べ」

若干楽しそうな色を声に含ませた拳帝は、手に持っていた二本の串肉を目では追えない速度で、かつ的確に男の口へと突っ込んだ。男は短剣を抜く間も無く不意を突かれ、熱々の肉汁垂れる串肉を口どころか喉元深くにまで差し込まれる羽目となった。

「ウゴツフツ！」

「どうだ？　美味しいか？　美味いだろう？」

「アガグツ……ウゲツツ！　グヴェー！」

「ちゃんと話さないか、顔と一緒に行儀の悪い奴だな」

冗談めいた口調で告げる拳帝の問いには、男が今まで感じた事もないような殺気と威圧感が放たれていた。熱で焼ける喉の痛みすらも忘れ、男は恐怖のあまりコクコクと何度も頷き返す事しかできなかった。

男の様子を見た拳帝は満足そうな笑みを浮かべ、一つ大きく頷いて真顔へと戻った。だが、殺気と威圧感はまだに放ったままである。

「よし。返事としては、なっちゃいないが……まあ今回は許してやるわ」

拳帝は頭を上下に激しく振り続ける男の髪を掴んで停めると、男の顔を間近で覗き込むように睨み付けた。

「さつきはゴミと言って悪かったな。お前はアルギン一家つてヤツの下っ端なんだな？　それなら、一つお前達のお友達に伝えておいてくれないか？　“誰に断わって、此处を自分達の縄張りだと名乗ってやがる。ここで暴力を飯の種にしたいのならば、今度からは俺に断りにきやがれアルギン野郎”……ってな。ちゃんと伝えるんだぞ？」

拳帝の細い鳶色の目は、鋭い眼光と共に殺意の光が宿っている。

それは時間が経てば経つ程に、男の恐怖心をさらに煽っていった。

心底から恐怖を味わった男は、拘束されていた頭を離され、力無く地面へと膝を落とす。口をだらしく開け、中に入った串が落ちた後によりやく正気に返ったらしい。熱に麻痺した口から泡にも近い涎を撒き散らしながら、言葉にならない言葉を発するだけだった。

大通り程では無いものの、騒ぎを聞きつけ集まった人垣の中から失笑が漏れる。

嘲りの目と失笑を受け、男の顔はさらに青冷める。

男は死人のような表情のまま――半ば腰が抜けた動作で拳帝が脚を乗せていたもう一人の男を抱え、慌てながらも去ってゆくことしか出来無かった。

「ん、折角貰った二本が台無しになっちまったな。オヤジ、悪いが俺は“遠慮”という言葉が大嫌いだな……また焼いてくれないか？」

「あ、ああ。別にいいが拳帝……アンタ、あんな事を言っちゃまって構わないのかい？」

「なあに、構わんさ。今日から俺も晴れてこの街での生活だからな。一般市民としての義務ってやつだ」

二人の男が去ってゆき、騒然とする周囲の空気をものともせず……拳帝は齒に挟まった肉を串で剥きながら、店主に向かってのんびりと言い放つのだった。

「ああ、そうだ。オヤジ、あんたにも伝えたい事があったんだ」「何だい？」

話題を自分へと振られ、店主は串を焼いていた手を思わず止めて拳帝の方へと顔を向ける。座っているにも関わらず、店主よりも背丈が高い拳帝は嬉しそうに目を細めていた。

「あんだ、随分と俺を熱心に応援してくれてたんだろ？　だつたら、俺のもう一つの呼び名を知ってるよな？」

「勿論知ってるとも！　【ノスフェラトウ（不死者）】だろ！」

「そう、それだ」

店主の返事に満足したのか拳帝は頷き、手にしている串を店主へと向ける。

「俺は【拳帝】よりも、そっちの名前の方が気に入ってるんだ。次からはそう呼んでくれ、俺は【ノスフェラトウ】のヴァルトってんだ」

言葉の締めとばかりにピン、と指で串を弾く。

それが使用済みの串を入れる容器の中に弧を描いて収まった様子を見て、【拳帝】とも【ノスフェラトウ】とも呼ばれる男——ヴァルトは可笑しそうに笑う。

そして……ヴァルトは店主が手渡すのを忘れていた新たな肉串を網から勝手に取り、さも当然の様に口へと放り込むのであった。

(1 - 2) 女を抱く拳

少しすえた匂いが狭い部屋一帯に漂う。

野性的な匂いの原因は、火が落とされたランタンから漏れる獣脂の臭いだけでは無かった。

薄暗い部屋の中で男女が睦み合う声と、ベッドの軋む音だけが響く。

木製の窓は開け放たれており、月明かりが室内に居る男女を照らし出す。抑えもしない互いの嬌声は外へと漏れ響いている筈だが、付近に住む人々が気にすることは無い。

何故なら――、この地区一帯が“そういう場所”だからだ。この地区では悲鳴ですら、耳に入っても人々は見向きもしないだろう。

月の光が照らす女の裸体は小刻みに揺れ続け、白い肌は熱でほんのりと赤く染まり、玉の様に浮いた汗が身体の線に沿って流れ落ちる。腰程まである長い髪は少し乱れ、身体の動きに合わせてフワリと揺れる。仰向けとなった身体の上に女を跨らせていた男が激しく腰を突き上げる度、女の幾度目かになる艶やかな嬌声が荒い息と相成って部屋に響き渡った。

「く、出すぞ……ッ！」

「駄目……そんなに激しくしたら、私もまた……」

最後の言葉代わりに、女は一度だけ大きく跳ね上がると男の肩に爪を食い込ませる。そのまま果てて身体を支えきれなくなったのか、

汗が滲む男の胸にぐったりと身を預けた。

筋肉質な身体の上に柔らかい女の肌を押し付けられた赤毛の男――ヴァルトは無言のまま口端を上げた笑みを浮かべ、女の髪を愛しそうに優しく撫でた。

ヴァルトが娼館へと赴き――アンジェリカと名乗る娼婦と共に、娼館の二階にある宿へと入ったのは陽が落ちてから暫くしてだった。

娼館に到着するまでにヴァルトの姿を見て商売も忘れて興奮する油売りの小僧や、仕事を終え娼館や賭場のある特別地区へと赴く労働者達から浴びる注目は相変わらずだ。そんな視線を鬱陶しく感じていたヴァルトを気遣い……アンジェリカが部屋で食事を取れる様に取り計らってくれたのには、素直に感謝を覚えた。

宿に入るなり湯場を借りたヴァルトは身体を洗い丹念に髭を剃ると髪に油を塗り、身なりを整える。数年振りに身なりを整えたヴァルトの見た目は先程までの薄汚い粗野な風貌から一転、歴戦の戦士や熟練の傭兵を連想させるまでの変貌を遂げていた。

渡されていた上質なローブを身に纏った後で食事が到着したのも、おそらく頃合を見計らっていたのだろう。口数少なく食事を頼張るヴァルトを、アンジェリカは妖艶な笑みを浮かべて楽しそうに眺めていた。

陶器のような白い肌と長い黒髪が神秘的な魅力となっており、対照的に大きくぱっちりとした黒い瞳は少女の面影を色濃く残している。その美貌は娼婦らしい化粧の匂いも薄く造られた美しさでは無く、天然がつくりだした美貌を讃えていた。

大人びた妖艶さと少女の様な愛くるしさ。アンジェリカは相反す

るその両方の魅力を兼ね備えた、不思議な女だった。

容姿もそうだが、立ち振る舞いや雰囲気を見ている限り……娼館の主人が『ウチで一番の娘』と、薦めてきたのも頷ける。

昼間食べた串肉とはまた違う、手間を掛けられた料理と自由になつてから初めて呑む酒に舌鼓を打っていたヴァルトだったが……突然アンジェリカに唇を塞がれ、ベッドへと押し倒された後に――店主の言っていたアンジェリカの評価を、再度違う角度から思い知らされる羽目となった。

もはや何度目かも分からない情事を終えて、ようやくヴァルトは人心地つく。

ベッド脇に備え付けられたサイドテーブルに置かれている葡萄酒の封を切った。瓶に口をつけ、直接それを流し込んで喉を潤す。葡萄酒はとうに生暖かくなっていたが、上質なそれはいささかも味は落ちていなかった。

身体を起こしたヴァルトの脇では、未だにアンジェリカはベッドに身体を投げ出し荒い息を吐いていた。アンジェリカは力の入らなくなった体を捻り、喉を鳴らして葡萄酒を飲むヴァルトを見上げる。ヴァルトは無言でその顎に手を添えると、アンジェリカの唇を自分の口で塞ぐ。そのまま、含んでいた葡萄酒を口移しで飲ませた。

「……んっ」

愛らしい声が喉の奥から漏れ、アンジェリカは驚いたように黒い目を見開く。

口の中に流し込まれた葡萄酒を飲み終えた後で妖艶な表情を浮かべ、お返しとばかりにヴァルトの舌を絡め取った。アンジェリカの可愛い悪戯に、ヴァルトは柔らかな舌に導かれるように、舌を深く絡めていった。

「……………まさか、もう一回？」

「いや……………」

絡め合った舌を戻し、離れたヴァルトの口から引く糸をアンジェリカは名残惜しそうに細い指で拭った。拭った指で自らの唇をなぞりながら、アンジェリカは呟く。

ヴァルトは短く否定した後、深い溜息を吐いた。

「久しぶりとはいえ、少し張り切りすぎたな」

「そうね、拳帝様だったら……………激し過ぎて私、壊されちゃうと思ったもの。闘技場だけじゃなくて、ベッドの上でも本当凄いのね」

「……………まあな」

多少なれども水分を取ったことで、体力もかなり回復したのだろう。アンジェリカはまるで猫の様に素早く、しなやかな肢体を引き起こして微笑む。そのまま上半身を起こしているヴァルトの厚い胸板に自身の豊満な胸を押し付け、甘えるように凭れ掛かった。

筋肉質なヴァルトの胸から次第に軽く這わせる指をおろし、最終的に下半身へと手を添える。先程までの濃厚な口付けの所為で起こったヴァルトの僅かな変化を確認した後は——アンジェリカは少女の様に目を輝かせ、胸元へと鼻を摺り寄せた。

「本当、凄いのね。さっきから何度もしてるのに、まだ元気なんだから……………」

「それだけ、女の身体に飢えていただけさ。いや……………違うな。“お前の身体が素晴らしいからだ”とでも言った方が気分がいいか？」

「あら、嬉しい。でも……………それを言っちゃったら、効果は半減しち

やうわよ？」

「なに、口での失態は体と態度で取り戻すのが俺の流儀だ。まあ……コイツは全くの嘘では無いから、失態では無いと思うがな」

ヴァルトは苦笑混じりにそう言うと、艶やかなアンジェリカの黒髪を撫で下ろす。心地良さそうに目を閉じて、されるがままになっているアンジェリカを、優しく自分の顔へと引き寄せた。

一方アンジェリカも抵抗するどころか待ってましたとばかりに、少し荒れたヴァルトの口に紅く湿った唇を合わせる。

その口付けは先程の様に深い接吻とは異なり、互いが軽く触れる程度で終わった。

「あら？」

期待外れだったのか、アンジェリカが疑問の言葉と共に形のいい唇を尖らせる。その可愛らしい拗ねた素振りを見て、ヴァルトは思わず苦笑を漏らした。

「……残念ながら、今夜は打ち止めだ。今日は色々とありすぎて、疲れちゃった」

「なあに？ 拳帝様が降参だなんて。私、不戦勝で勝っても嬉しく無いわ」

「そう言うな、一時休戦なだけだ。……少しだけ、眠らせてもらっても構わないか？ それからならば、アンジェが失神するまで犯ってやる」

「んもう……何よ、思わせぶりな素振りだけ取って放置するなんて酷いわ……」

「すまん。だが本当に……眠気が限界でな。自由になったからといって、少々浮かれていたのかもしれない」

ヴァルトは目頭を揉みながら睡魔と格闘するも、とうに限界を迎えた眠気は抑えようが無い。その様子は傍から見ていても充分なも

のであり、アンジェリカも諦めがついたらしい。

「分かったわ、寝かせてあげる。けど……、次に目が覚めた時は覚えてらっしゃい」

「は……ははっ、お手……柔らかに頼……」

言葉を最後まで言い終わらぬうちに、ヴァルトは瞼を閉ざした。アンジェリカの柔肌を滑り、ベッドへと巨体を倒れ込ませる。

静寂の中、規則正しいヴァルトの寝息と外から聞こえる夜虫の鳴き声を耳に――。アンジェリカは暗い部屋で微笑みを浮かべていた。

「おやすみなさい、拳帝様……」

笑みを浮かべ、アンジェリカは僅かに開いているヴァルトの口へと自身の唇を当てる。触れるだけの軽い口付けを交わしても、寝息を立てているヴァルトは何も反応を見せない。

ヴァルトが眠りに落ちている事を確認すると――アンジェリカは座っているベッドの上で、少しだけ身体を折って腕を伸ばす。

慣れた手つきでベッドの隙間から、音も無くそれを引き抜いた。

白く細い手に握られた細身の刃は、月の明かりに反射して冷たい光を放つ。

凶器を手に持ち月に照らされたアンジェリカの表情からは、先程まで浮かべていた女性らしい艶やかな笑みは消え、まるで人形のような無機質なものとなっていた。

躊躇いすら無く、無駄の無い洗練された動作でアンジェリカは刃を頭上高くに振り上げた。ヴァルトの首筋に目掛け、切っ先を勢

い良く下ろす。

しかし――

アンジェリカが感じたものは、刃が肉へと沈み込む感触でも、命が途絶える前に対象の喉から上がる血に混じった声でも無い。アンジェリカがそれらを感じ取る前に直感が働き、無意識のうちに刃を止めていた。

娼婦としてのものか、暗殺者としてのものかは分からない。いずれにせよ今まで直感に幾度も助けられたアンジェリカにとって、それはどうでもいい事だった。

「ねえ、起きてるんでしょ？」

相手の命を絶とうとしていたにも関わらず、悪びれた素振りなど何一つ見せずに、アンジェリカはヴァルトに問い掛ける。その口調はむしろ嬉しそうで――手に持つ刃さえ除けば、悪戯がバレた子供の様に嬉々としたものだった。

「……ああ」

ヴァルトは閉じていた瞼をゆっくりと上げて短く答えるだけで、自分を殺そうとしているアンジェリカに対して怒る気配など微塵も無い。

「どうして……？」

「何がだ？」

面倒臭そうに顔だけを上げ、ヴァルトはベッド脇で刃を手にしたまま立っているアンジェリカを見上げる。

「さつき貴方が飲んだ葡萄酒には強力な薬を入れておいたのに……まさか、私と同じように解毒剤でも飲んでいたのかしら？」

「いや……闘技場に長く居過ぎるとな、色々と不便な身体になっちゃう。余りにも俺が負けないからと、ここ一年程は趣向を変えて様々な魔物だのを相手にさせられていた。勿論、中には毒を持った奴等もいてな、そいつらの毒を喰らっているうちに……毒が効かない身体になっちゃっただけさ」

「そう、それじゃあ普通の人間用の薬なんて効きっこ無いわね……全く、貴方ってそんな所まで規格外だったの……誤算だったわ」

「そういう事だ、商売の邪魔をして悪かったな」

「いえいえ、これは私の落ち度だもの」

長い髪を揺らして笑うアンジェリカの表情は、あくまで明るく楽しそうである。だがヴァルトの視線はその美しい顔では無く、僅かに震えている手を静かに見据えていた。

「どうした？ それを振り下ろさないのか？」

「気付かれているのに殺すなんて、そんな無様な真似はできないわ」
自分が試されている事に気付いたのか、アンジェリカは手に持っていた細身の刃を後ろに投げ捨てた。溜息交じりに首を横に振ると、つまらなさそうにベッドへ形の良い尻を落ち着かせ脚を投げ出す。

「私はね、これでも一流を自負しているのよ。相手に気持ち良くなつて貰って、幸せな気分のまま……自分が殺された事すら気付かない様に、優しく命を刈り取ってあげる。それが私の美学なの」

「そいつは、すげえ美学だな」

「……それ、本心から思ってる？」

「俺は野郎を騙しても、美女を騙す様な真似はしない。それに……そういう拘りを持つてゐる奴は嫌いじゃないぜ」

疑う様な眼差しを向けてくるアンジェリカに対し、ヴァルトは肩

を疎めて答える。返答が不満だったのか、アンジェリカは頬を膨らませてヴァルトを睨み付けた。

「だから……気付かれた時点で私の負け、ってわけ。そういう事」

「そういう事、か……」

軽い冗談を言い合う様な口調だが、アンジェリカの告げた言葉の真意は重い。

死を覚悟した暗殺者――アンジェリカの潔い態度を前に、ヴァルトは苦笑を浮かべて両腕を頭の後ろへと組んだ。いくら月明かりがあるとはいえ、天井までは見えない。それでも、ぼんやりと何処を見るわけでも無くただ鳶色の目を瞬きさせる。

「ねえ、最後に一つだけ教えて」

「何だ？」

「最初から……気付いていたの？」

真剣なアンジェリカの口調に対し、ヴァルトは暫く言葉を頭で巡らせた。

「いや……気付く気付かないとか、俺は別にどうでもよかった。ただ……この馬鹿な体が、気配に関しては過剰に反応しちまってな」
「気配？ 殺気なんて私は……」

自分の手腕を一流だと自負している為か、アンジェリカが怒った様に反論する。

死を覚悟こそすれ、最期の時まで自分が犯した欠点を追及したいのだろう。そんな彼女だからこそ、ヴァルトは飾る事無く素直に言葉が続けた。

「違う。アンジェ、お前は完璧だった。……完璧すぎたのさ」

「何よそれ？」

「完璧だからこそ、気配を完全に消していた。だが……人としての

気配まで完全に消す行為は、殺気を出してるのと同じ違う?」

「……成る程ね。一流すぎるのも考えものだわ……けど、納得でき
たわ。有難う」

「話は終わりか?」

「ええ、もう全ては終わり。……一流の最期としては、悪く無い終
わり方ね」

「そうか、じゃあ……」

ヴァルトは言葉尻を濁し、頭の後ろで組んでいた腕を解く。脇に
座っていたアンジェリカの手を掴み、そのまま細い腰を抱き寄せた。
驚いて息を呑むアンジェリカを無理矢理寝かせて、強引に自分の
胸元と背中を密着させる。自分の状況が理解し難いのか、戸惑うア
ンジェリカの首筋へと何も言わずに顔を埋めた。

香水と女の香りの中に混ざり合った、微かな雄の匂いがヴァルト
の鼻腔をくすぐる。腕の中で戸惑うこの魅力的な存在に対し、さら
に己の匂いをつけてやろうかとも考えるが——結局、散々満たされ
た性欲以上に、睡眠に対する欲が勝る結果となった。

「ちょっと、何のつもり?」

「今度こそ俺は寝る。起すなよ? もし、殺したいのなら……今度
こそ起さないように頼む」

「私を生かすっていうの? 次こそ本当に殺すかもしれないのに?
ねえ、聞いて……」

驚くアンジェリカの抗議は、ヴァルトの手がその豊満な胸を揉み
しだく感触によって遮られた。

「構わないさ、女の胸で死ぬのも悪くない。それもお前みたいな、
飛びきり上等の女なら尚更だ。そう……男の夢、ってやつだな」

呟きながらも、ヴァルトの無骨な手止まらない。まるで壊れ物に
触れるように、優しく力強く柔らかな胸を揉み続ける。しかし、そ

の勢いも少しずつ衰えていき——完全に止まる頃には、アンジェリカの耳元で静かな寝息をたて、眠りについていた。

「呆れた……本当に酷い人ね」

溜息と共に吐かれたアンジェリカの呟きは、諦めの気持ちよりも呆れが色濃く現れていた。

「“起こさずに殺せ”って……貴方相手じゃ無理だって思い知ったばかりなのに……」

身体を起こそうとしても、背後から腕を回されている以上それすらもままならない状態である。

そして何より……眠りに落ちる直前まで身体を触られていた為に、アンジェリカの下腹部が疼きに近い熱を宿し、火照った身体が離れる事を拒んでいた。

「こんな事なら、いつそ殺された方がマシだったわよ……」

今まで出会った事が無い程にまでアンジェリカを魅了する強烈な雄の匂いと、粗暴な外見とは裏腹に自分を大切に扱う男に抱かれ、アンジェリカは毒付く。

だが、文句言ったところで眠っている人間の耳には届く筈も無く、アンジェリカは悶々とする身体と行き場を失った気持ちで、ヴァルトの手の甲を一度だけ叩いた。

「何よ、起きないじゃない……馬鹿」

一瞬寝息が途絶えるが、すぐさま耳元を擦る感触に、アンジェリカは拗ねた様に呟くのだった。

(1 - 3) 優しさ溢るる拳

眠りの世界へと落ちてから、どれ程の時間が経っていたのかは分からない。

何か夢を見ていた様な気もするが、それも今となっては定かでは無い。

肌が気取った気配の所為で、不意にヴァルトは睡眠から現実へと引き戻された。

既に頭からは睡魔の欠片は取り払われ、意識は覚醒している。それでも目は閉ざしたまま、耳に意識を集中させて周囲を確認した。

ヴァルトの肌が感じ取ったものは、明確な殺意だった。

但しそれは、寝る直前まで腕に抱いていたアンジェリカのものでは無い。今でも腕に掛かっている僅かな重みと、温もりは目を開けなくとも分かる。

ヴァルトへと注がれている殺気は部屋の外——鎧戸も閉めず、開け放たれた窓の外からだ。

場所こそ漠然ながらも把握するものの、殺気以外のものが何時自分へと降り掛かってくるかまでは分からない。事態に備えるかの様に、ヴァルトの身体は自然と動く。

ヴァルトの僅かな動きを悟ったのだろう。腕の中で温もりを発していたアンジェリカの腕が伸び、ヴァルトの太い首へと回された。うなじを這う髪感触と首筋に掛かる息に負け、ヴァルトは閉じていた瞼を開ける。

「あら、起きちゃったの？」

ヴァルトを殺そうとしていた美しい暗殺者は、間近な距離で微笑みながらそう言う——ヴァルトの唇に軽く自分の唇を押し付けた。

「さっきまで可愛い寝顔を見せてくれていたのに……本当、貴方って敏感なのね」

「あそこまで無粋な殺気を放っていたら、死体でも目が覚めちゃうだろうよ」

「……確かにそうね」

そう言うアンジェリカは甘える子猫のような仕草で、ヴァルトの胸に鼻を摺り寄せる。

「私が仲間を呼んだ、っていう考えは無いのかしら？」

「一流の暗殺者が、お友達と仲良く手繋いで暗殺か？……面白い冗談だ」

無言で胸に顔を埋めたまま首を横に振るアンジェリカに対し、ヴァルトも何も言わず柔らかい黒髪を撫でただけだった。

「心配いらないわ。この場所は私の縄張りだって明確にしてあるから、手出しは出来無いの。そうね……私に対しての嫌がらせみたいなもの、って言えば分かって貰えるかしら？」

「嫌がらせ？」

アンジェリカの放った言葉の意味が分からず、ヴァルトは上半身をベッドから起すと訝しげな表情を浮かべる。

「そう。貴方を私に殺させない為に、わざと殺気を放ってるのよ。それで貴方を警戒させて、私の仕事を邪魔しようって算段なんでしょうね……」

「成る程。だが、辛気臭いな……暗殺者っていうのは、皆そう陰険な奴等なのか？」

「一流どころ以外はああいう感じよ、だからアイツらは……良くて二流止まりなのよね」

「……へえ」

ヴァルトはそれ以上は何も聞かず、ベッド脇に置いたままだった葡萄酒に手を伸ばした。残りを一気に飲み干し、豪快に口から噎気を吐く。

アンジェリカもシーツを払いのけて、ベッド脇に腰掛ける。ヴァルトと並んで座り、スラリと伸びた綺麗な足を組んだ。こちらは緩慢としたヴァルトの動作とは対照的で不機嫌そうに形の良い唇を尖らせていた。

「それにしても不愉快だわ。下劣な三流野郎のクセに……」

続けて「殺してやるのかしら？」と可愛らしく小首を傾げて呟いた物騒な台詞が耳に入り、ヴァルトは思わず苦笑を漏らす。そして宥めるように、アンジェリカの肩を抱き寄せた。

「止めとけ、止めとけ。馬鹿に構うと馬鹿がうつる。それに、あの程度の奴にお前の身体を好きにさせるのは……俺が不愉快だ」

「あら」

アンジェリカが嬉しそうにヴァルトを見上げ、言葉の真意を確かめようとする。だがその時、既にヴァルトは腰を屈めており、アンジェリカの視線を退けていた。

「ああいう輩はな……」

床に落ちていた“あるもの”を拾い上げ、それを手にしたヴァルトはアンジェリカへと顔を向ける。相変わらぬの仏頂面を浮かべたままだが、その細い目は獲物を狙う獣の様な輝きを放っていた。

「こうしてやるのが……一番だ」

ヴァルトが手にしていたものは、アンジェリカが床へ投げ捨てた細身のダガーだった。

柄を逆手に握り込み、素早く窓から身を乗り出す。

窓の外は、未だ夜明けには至らない暗闇が広がっている。にも関わらず、ヴァルトは前の五ルード（約五メートル程）先も見えない闇を暫く見据えて、相手に狙いを定めていた。

狙いを決めるや否や——ヴァルトは迷う事無く、一切の無駄を省いた動作でダガーを大きく振りかぶった。それを闇に閉ざされて、見えない筈の路地へと投げつける。

刃がまだ微かに残る月明かりに反射し、一瞬だけ鈍く輝く。

ヴァルトがダガーを投げた一呼吸後、静寂な闇の中から何かに突き刺さる生々しい音と、声を殺し切れずに叫ぶ男の声が二人の耳に入った。

抑える事を忘れた足音は途中で何度か途切れ、やがて静寂が訪れる。

先程までのあからさまな殺気は、小さくなる足音が聞こえる前からとうに消え失せていた。

「殺したの？」

アンジェリカの言葉にヴァルトは犬歯を見せ、獰猛な笑みを浮かべて振り返った。

「いや、殺す価値もない。だがあの様子じゃあ……“男”としては、死んだだろうな」

喉で含み笑いを漏らしながらも放つヴァルトの言葉で、アンジェ

リ力は全てを悟ったようだ。愚かで不運な同業者を哀れに感じたのが整った顔は一瞬曇るも、やがてその表情はすぐに和らぐ。次の瞬間には、心地の良い声で笑い声を部屋に響かせていた。

「あらあら、ちゃん切られちゃったの？ 哀れな男ね。そうだ、次会ったらウチの店番として雇ってあげようかしら？ ふふふっ……」
「それにしても……さっきの馬鹿はともかく。お前みたいな暗殺者を何人も雇うあたり、依頼主は随分と太っ腹だな？ もしくは余程、俺の事を恨んでるのか……」

機嫌良く笑うアンジェリカを横目で見ながら、ヴァルトは眉を顰めて自分の命を狙う人物に対して考えを巡らせた。

成功報酬で暗殺者を雇うには、暗黙の掟が存在している。

一度に一人しか雇わない、それが裏の世界での掟であった。無論これは、少しでも危険な橋を渡る稼業に携わっている者ならば誰でも知っているような範囲での常識であった。

“暗殺を謀るのに、一度に雇うのは一人”

これは裏を返せば——多数の暗殺者を雇うという事は、依頼した暗殺者の腕を信用していないと言われるのと同義語である。

暗殺者と呼ばれる稼業についている人間は、自尊心が高い者が多い。

アンジェリカが例外というわけでは無く、何らかの拘りを持って仕事を行う輩が多いとヴァルトは昔聞いた事があった。もしも、複数の者に暗殺を依頼していると暗殺者が知ったのなら、決して良い顔はしないだろう。事実過去に、暗殺者が複数雇われている事を知った暗殺者達が依頼人の敵に回った事件が何度もあったらしい。

勿論、複数雇う場合も状況によりは存在する。これは、前金で暗

殺依頼を行う場合のみ可能とのことだ。但しそれでも、単独で行動する暗殺者を雇う事は出来無い。分配という形を容認出来る三流の夜盗崩れ程度を雇えるのが関の山である。

これらの事例を考えれば考える程、答えを導き出す道が塞がってしまう。

前者を疑えば、アンジェリカがここまで落ち着いている事に納得がいかない。

後者を疑えば、ヴァルトから見ても腕利きである彼女を雇う事など到底出来る筈も無い。

ヴァルトの頭に浮かんだ疑問を、娼婦が持つ特有の感覚で鋭敏に嗅ぎ取ったのか……アンジェリカはヴァルトの傍に近寄ると、悪戯っ子のような笑みを浮かべて瞳を覗き込んできた。

「ねえ、何を考えているのか当ててあげる。今、貴方は“誰に命を狙われているか”では無く“何故、複数の暗殺者が襲ってくるのか？”って、疑問を抱いてるのでしょうか？」

「……よく分かったな」

「私の副業は、さつき貴方も堪能したでしょ？ 私が今まで、どれだけ人の内に抱え込んだものを見透かしてきたと思っているの？」

アンジェリカはそう言って、自慢げに豊満な胸を突き出す。

「その疑問、答えてあげてもいいわよ？」

未だ服も身に纏っていない胸は勢いで揺れ、柔らかさと豊満さをより強調させた。

「何だ？ 身体に聞け、ってか？ それなら俺も望むところだが……」

「普通そつくる？ もう……起きたてなのに元気なんだから」

冗談めかして言ったヴァルトの言葉に、アンジェリカは唇を尖らせて答える。冗談ついでにヴァルトは目の前で揺れる胸へと腕を伸ばすが、その手は簡単に叩き落とされた。

「こいつは手厳しいな。だが、冗句は置いといて……理由は話してくれると有難い。俺にはどうも……さっきの馬鹿とお前のような一流どころが、同時に同じ人間を狙う理由がさっぱり分かりそうにも無い」

「答えは簡単よ？ 私は誰かの依頼を受けたわけではないし、さっきの馬鹿も依頼を受けて殺しに来たって訳でも無いわ」

「謎掛けか？ ……さらに分かん。何だ？ “誰が一番に俺を殺すのか？” って、暗殺者の中でそういう賭けでも始めたのか？」

「そうね、そんな感じ」

「見ての通り俺は馬鹿だからよ……意地悪は止めて、さっさと教えてくれないか？」

「あらあら……」

両手を挙げ、素直に降参の意を示したヴァルトを見上げるアンジェリカは笑顔を浮かべていた。だがその顔は笑っていても、大きな眼には暗殺者としての鋭い眼光が宿っている。

「意地悪は言つて無いわ、さっきの貴方の言葉は正解よ？ 【拳帝】またの名を【ノスフェラトゥ】のヴァルト。……今、貴方の首には賞金が掛けられているの」

「自由になったその日に、めでたく賞金首かよ……」

「そう。だから今——この街にいる腕に覚えのある暗殺者や、賞金稼ぎ達がみんな貴方の虜になっちゃってるのよ」

あくまで笑みを絶やす事無く笑いかけるアンジェリカの話を理解

するにつれ、ヴァルトの顔に明らかな嫌悪が色濃く現れる。

「あー……つまりは、これからも“ああいう馬鹿”が、雁首揃えてやつてくるって事か？」

「あら、拳帝様は御不満？ モテていいじゃない」

「お前みたいな良い女に付け狙われるならば大歓迎だが、ムサイ男共に狙われるなんて……ぞっとしないな」

寝癖が付いた髪を何度も指で掻きつつも、口に笑みを浮かべたヴァルトはさも当然の様に言い放つ。だが世辞の類を聞き飽きているのか、アンジェリカは微笑みながら「あら有難う」と一言返しただけだった。

「でもこの街で、貴方に挑むような一流所は知れてるわ」

肩を竦めるヴァルトの方には目を向けず、上を仰ぎ思い出す素振りを見せながらアンジェリカは細い指を折りつつ矢継ぎ早に言葉を続ける。

「賞金稼ぎなら“鉄球ゴーディ”に“双頭黒犬ラース”と、暗殺者なら“針十字スレイ”や“影踏シャルワ”……それに私こと、“毒蟲惑アンジェリカ”が有名かしら？ あとは名前も知られていない二流三流もいいとこね？」

指折り数えて告げられてゆく名前の数々に、ヴァルトは心底うんざりした表情を浮かべる。

アンジェエのような、男にとって素晴らしい美学を持つ者に命を狙われるなら気分もまた違うのだろうか……名から漂ってくる印象の限り、到底そのような容姿はおろか、手段も穏やかなものでは無いだろう。

男、それも——陰気な性質の輩に寄ってこられて喜べる趣味は持ち合わせていない。ヴァルトは沈む気分を抱えたまま、気持ちを切り替えようと異なる話題を振ることにした。

「賞金首ねえ……一体いくら掛かってるんだ？」

ぽつりと漏らしたヴァルトの言葉に、アンジェリカは向き直ると無言で指を二本立てる。

「へえ、金貨で二十枚とは豪気なことだ」

「残念……銀貨で二百枚よ……」

「……おい」

言い辛そうに顔を曇らせながらも訂正するアンジェリカの言葉は、最初ヴァルトは自分の聞き間違えかと思い耳を疑った。

「そんな顔しないで頂戴よ、私だって金額は言いたく無かったんだから……」

ヴァルトの変化を見て、アンジェリカは戸惑いながらも首を横に振る。その仕草を見ても、目の前にいる暗殺者の言葉は嘘偽りが無いものだろう。

今度こそ、ヴァルトの顔は固まった。

ウグルゼ王国の王都でもある此处、アリユテーマの街に住む平民の平均的な年収は銀貨で一五〇枚程度である。質素な生活をすれば一年を過ごすのに充分足りうる額とは言え、賞金額となれば銀貨二百枚というのは異例の金額であろう。

金貨の場合、時事の相場によって変動に拠るが……平均的には銀貨五百枚前後に対し、金貨一枚と考えられている。

ヴァルトが愕然としたのは、何も自分の存在を買いかぶっていた事でも驕りでも無い。ヴァルト以外の人間がこの額を聞いたとしても、皆同じ反応を表すことだろう。

銀貨二百枚という額。それは——文明的にも発展したウグルゼ王国が所有する闘技場の覇者であり、拳帝ともノスフェラトゥとも呼ばれた男の首に掛けられる賞金にしては格安どころか、捨て値もいといところの額であった。

自分でも知らず知らずのうちに、ヴァルトは殺気を漲っていたらしい。表情も硬直ですら通り越し、怒りで頬が熱を持っていた。

ヴァルトの反応は、自身の命を平民の年収より少し上程度に考えられた者としては当然のものだろう。だが、傍にいるアンジェリカとしては居心地の悪さを感じずにはいられない。

変化していったヴァルトを宥めるように、当惑しつつもアンジェリカは言葉を発した。

「ちょっと、そう殺気立たないでよ……」

「いや……お前、そりゃあ……俺の命をそこいらの浮気旦那でも殺すような値段しか掛けられてないんだ。自分がそんな目に合ってるよ？ 殺気立ちもするさ……」

「ま、まあそうだけど……」

ヴァルトが怒りを滲ませる理由も充分承知してかアンジェリカは戸惑いつつも、最後に「でもね」と付け加える。

「逆に貴方だからこそ、この値段で十分なのよ？」

「はあ？ 納得いかんぞ。いくら俺が奴隷あがりの男だからって……」

「そういう意味じゃなくて、そもそも……あなた勘違いしていない？ これが殺しの依頼ならむしろ依頼人が殺されても文句は言えない値段だけど、賞金だと意味合いが変わってくるのよ？」

アンジェリカは部屋に満ちる濃密な殺気に気圧されるも、負けじとヴァルトへと詰め寄った。ヴァルトも幾分落ち着き、眉を顰めて素直に疑問を返す。

「どういう事だ？」

「あのね、まず最初に私の名譽の為にも言っておくけれど……賞金稼ぎにしる暗殺者にしろ、無秩序に誰でも狙っていい訳じゃないわ。」

必ずそこに第三者の存在が関わっているってこと。そうじゃないと賞金稼ぎもただの無頼者に、暗殺者もただの殺人者に代わってしまう」

「まあ、そうだよな」

「けれども……そこに賞金が掛けられると話が変わってくるの。例えばそれがどれ程に安い金であろうとも、殺す大義名分を得られるのよ。そして、貴方は金じゃ計りきれない価値がある存在なの」

「……“名声”ってやつか？」

不機嫌さの余り、さらに細い目を細めながらヴァルトが漏らした言葉にアンジェリカは一度だけ大きく頷いた。

「そうよ。“闘技場最強の男”“剣聖をも超える拳帝”“不死者ヴァルト”を殺した人間は、一生仕事に困ることはないでしょうね？しかも、割の良い仕事だけを選び好みだってできる。売り込めば仕官の道だって望めるわ。それ位、貴方は有名で特別な存在なのよ」

「……とんだ迷惑だ」

怒りの矛先をアンジェリカに向けるわけにも行かず、再びベッドの上に寝転びながらヴァルトは大きく溜息を吐いた後に悪態を吐く。

「全く……これまで生きるか死ぬかって事に必死だったのに、自由になっただけで結局これか？ 本当、世知辛い世の中だね……」

ヴァルトは手で目を覆いながら天井を仰いだ。

素直に真正面から襲って来るのなら、打ち倒せばいい。だが人の命を奪う事を生業としている人間の場合、そうで無い者が大半であることをヴァルトは知っている。

悪態の言葉も尽き、今はただ溜息しか出てこなかった。

「御愁傷様。なんなら賞金を掛けた相手を教えましょうか？」

「いや……、今は良い。折角良い女と居るにも関わらず、これ以上は無粋だろ？ そんな事は次にアホ面晒してやってくる奴にでも聞いて”おくさ”」

「まあ怖い」

「そんな事よりも、だ」

芝居掛かった仕草で口に手を当てて笑うアンジェリカの方へと身体を向け、ヴァルトは意地の悪い笑みを浮かべた。

「……口直しに約束通り、アンジェを“天国”って所に連れて行ってやりたいんだが？」

「あらっ、ふふふっ。ちゃんと約束、覚えてたのね？ 嬉しい」

ヴァルトはアンジェリカの腰に手を回して、自分の胸元へと引き寄せた。

綺麗に収まったアンジェリカの耳元へと口を寄せ、耳朵を軽く噛んでやる。甘い息を漏らしながらも、アンジェリカがそれを拒む事は無かった。

「ちゃんと今度は、私が満足する“天国”に連れて行って頂戴。もしも、私が満足出来無かったら……今度は私が貴方をさっきの馬鹿みたいにしちゃうわよ？」

「そいつは、勘弁してほしいな……」

苦笑を浮かべながらも放つヴァルトの言葉など、まるで聞こえないかの様な素振りでアンジェリカは強く胸に顔を摺り寄せてくる。

素肌の胸に押し当てられた頬も心地良いが、顎に指を沿え上を向いた唇に口付けをする感触の方がヴァルトには何倍も魅力的に感じてしまう。

口付けが開始の合図だとばかりに、ヴァルトも何も言わずアンジェリカをベッドに押し倒すと、均整の取れた肢体へとのかかった。

かくして——朝靄立ち込める娼婦街に、一際甲高い嬌声が響き渡るのであった。

朝霧も晴れ、活気が出始めた朝の街中をヴァルトはゆっくり見回しながら歩く。

横には腕を組み、寄り掛かるような形でアンジェリカが連れ添っていた。

露店に商品を並べている最中の露店商や、朝一番に仕入れの荷を載せて大通りを走る馬車などが激しく行き交っていた。それらが展開する光景の中、腕を組みながら寄り添って歩く男女の姿は、少々場にそぐわない光景となっている。だが、本人達には全くそれを気にする素振りは見られなかった。

アンジェリカは地味な服を身に纏っているも、美しい顔立ちと服越しからでも分かる魅力的な身体はやはり道行く男性の目を惹くらしい。一方のヴァルトも闘技場に居た頃とは違い、身なりは整えているものの体格の良さが相まって二人の存在をさらに浮き立たせていた。

「言ってくれば、ご飯ぐらい作ったのに……」

ヴァルトの太い腕に胸を押し付けながら、呟くアンジェリカの声には不満の色が混ざっていた。朝方まで続いた情事の所為で乱れた髪と化粧も今ではすっかり整えられ、その余韻はもはやどこにも残されていない。

「いや、昨日も思っていたんだが……久し振りに自由な飯を食べるんだ。狭っ苦しい部屋で食うよりかは、お天道様の下で食う飯の方が美味く感じてな」

ヴァルトはそう言いながらも、アンジェリカが掴んでいない方の手に持っていた細長いパンへと齧り付いた。

「ん、やっぱり美味しいな」

次々と齧り付き、歩きながらだというのにも関わらずあつという間に一本を食べ終える。口を動かしながらも即座に袋を持つアンジェリカに催促をするヴァルトを見て、アンジェリカは溜息を一つ吐いて新しいパンを手渡すのだった。

それは早朝から働く商人相手の露店で購入したのだが、匂いにすられ買ってみると意外と美味しい事に驚いて、ヴァルトが迷わず袋一杯買い込んだものだ。今ではアンジェリカが持つ食べ物を入れる麻袋が、一杯になる程にまで詰め込まれている。

肉と香草を煮込んだ汁にじっくり漬け込み、そこからさらに焼き上げたパンは実に香ばしいものだった。表面は固くなっているものの、中はしっとりとしており何本食べても飽きは訪れない。無論、それなりの手間が掛かっているだけに、値段もそれ相応のものではあった。一本辺りの値段すら普通の金銭感覚を持つ人間ならば躊躇うような値段である。

袋一杯にもなるパンの値段を聞いても臆する事無く、ヴァルトが銀貨二枚を即決で払う光景を見ていたアンジェリカなど呆れ果てていた程だ。

「……ヴァルトは早くお嫁さんを買った方がいいわね……」

「んあ？ 急にどうした？」

横目にじつとりと睨みつけるアンジェリカに、ヴァルトは心底不思議そうな視線で返す。

「いくら貴方が強くても……金銭感覚は人並みでいい、って事よ」
「何だそりゃ？」

全く以ってヴァルトが言葉の真意を理解していないのを悟ったのか、アンジェリカはこれ見よがしにもう一度深く溜息を吐いた。

「お、あそこにも美味そうなもんが……」

「ちよつと！ まだ、パンが残ってるでしょ！」

再び匂いにつられ、そちらの方へと向かおうとするヴァルトだったが、強い静止の声と共にアンジェリカに腕を引っ張られた。

「なんだよ？ 大丈夫だって、まだ食えるから……」

「絶対ダメ！ もう……パンを食べ終わるまで他の物を買うのは禁止！ いいわね！？」

「……あ、ああ。分かった……」

「本当に分かつてるの？ 全く……お金を稼ぐっていうのが、どんなに大変な事か……」

ヴァルトへと詰め寄るアンジェリカの気迫は凄まじく、彼女と出会って初めて感じたものであった。アンジェリカはその勢いに乗ったまま「何時までも露店商のところにいるといいカモになる」と愚痴りながら露店通りから離れようと、半ば強引にヴァルトの手を引っ張ってゆく。

力では明らかに勝っているヴァルトも、流石に女の剣幕には敵わない。

戸惑いを見せつつもヴァルトはアンジェリカに引き摺られるように、街の広場に向かう道へと向かうべく露店通りを後にした。

暫くの間歩いていると飲食物が並ぶ露店通りから抜け、そこら一帯に漂っていた香ばしい匂いと人々の喧騒も随分と収まってきた頃だった。

アンジェリカが何かに気を取られたのか、ふと立ち止まる。

「……どうした？」

黙々と麻袋の中に収められたパンを消費していたヴァルトも、アンジェリカの引つ張られるままにされていたので必然と歩みが止まる。急に足を止められた理由が分からず、隣に立つアンジェリカへと目を向けるとヴァルトの方を見る事無く、その黒い瞳はある一点へと向けられていた。

夜明け前に現れた暗殺者を撃退した際に物騒な理由を聞いていた所為もあり、自分を狙う何者かの存在をアンジェリカがいち早く察知したのかという可能性をヴァルトは疑ったものの、どうやらそうでは無いらしい。

素早くアンジェリカの視線を追った先に見えた者は、暗殺者や賞金稼ぎからはほど遠く離れた者達だった。

アンジェリカが向ける視線の先——露店通りに隣接する路地裏には、少女が幼子の手を繋いで立っていた。

おそらく、露店通り一帯に漂う匂いに誘われてきたのだろう。路地の入り口から物欲しげに露店を伺う姿は、ボロを纏った浮浪

児であることは一目でわかる。年の頃は三歳かそこの幼子の手を引いている少女も、容姿を見る限りまだ幼い表情をしている。彼女達が姉妹であるう事は、くすんで伸びた金色の髪と似通った顔立ちからすぐに分かった。

道行く人々の視界に少女達が映っているのは勿論だが、皆その少女達が見えないものの様に扱い素通りしてゆく。ヴァルトとて、アンジェリカが立ち止まらない限りは恐らく視界に入ったとしてもさほど気には留めなかっただろう。

ヴァルトが闘技場へと幽閉される前から、街にこの様な浮浪児が立っている姿などさして珍しい光景ではなかった。

世の政など知る由も無い場で過ごした五年の間で、ヴァルトが得た時事の動きなどはたかが知れている。前王が崩御し新王に代わった程度の知識しかヴァルトは持ち合わせていない。だが……例えば誰が国を支配しようと、その恩恵を受ける者などはほんの一握りの人間にしか過ぎない。という事は、自由を束縛される前からとうに知っていた世の理であった。

街に住む者としては、日常の一光景にしか過ぎない浮浪児達に何故関心を抱くのか？

隣に立つアンジェリカの意図が、全く以って分からない。ヴァルトは再び視線をアンジェリカへと戻した。

娼婦と暗殺者の二面を持つ美しい女性は、路地に佇む二人を見つめたまま目を細めている。何を考えているかは解らないものの、その整った顔に浮かぶ表情はヴァルトが最も良く知っている——とある感情を露にしたものだった。

「あのね……」

近くにあるものを見据えているにも関わらず、その先に何かを見

ている様な目のままアンジェリカはポツリとヴァルトにしか聞こえない小声で呟く。

「私、孤児だったのよ。その日に食べる物も苦勞して……。あの歳位の時は私もあの子達みたいに、ああして露店を見ていたわ」

口に出して呟いているのは、ヴァルトに聞いて欲しいからなのだろう。だが、生憎ヴァルトはアンジェリカの言葉に対する返答は持ち合わせていない。

その場凌ぎに適当な相槌を打つのは簡単だろうが、それは決してアンジェリカの求めているものでは無いだろう。だからこそ黙ってアンジェリカの独白に耳を傾けていると、腕を抱く力が僅かに強くなった。

「やつぱり私がああして立っていても、道行く人は誰も見向きもしなかったわ。そして私は、毎日神様を呪い続けた……。どうして、私がいる場所はこんなに薄暗いのだろう。どうして、光は決まった所にしか当たらないのだろう……。ってね」

一通り話し終えて我に返ったのか、アンジェリカは自分でも驚いた様な表情で軽く首を振った。続いて苦笑を浮かべると、ヴァルトから腕を放して目を伏せる。

「……ごめんね」

「いや」

一時の感情に任せて吐いた自分の過去を、笑みと共に消し去ろうとしている努力が伺える。そんなアンジェリカにヴァルトは一言だけ言葉を返すと、アンジェリカの髪を軽く撫でた。

アンジェリカもそれ以上は何も取り繕う必要が無いと理解したらしい。軽くヴァルトに頼いた後は、成り行きを見ていた少女達の方へゆっくりと歩み寄っていった。

少女達には先程の会話など聞こえている筈も無く、急に近付いてくるアンジェリカに対し明らかな怯えを見せた。少女は咄嗟に幼子の手を引いて、一旦は路地の裏へと引き返そうとする。だがその足は、アンジェリカが浮かべる優しい笑顔を見て止まった。

「そんなに怯えなくてもいいわ」

久しく人の優しさを感じていなかったのだろう、戸惑いながらも少女達は手を伸ばすアンジェリカの方を呆然とした様子で見上げている。

「私は何も酷い事なんてしないから。ね？ そうだ、お名前を教えてくださいませんかしら？」

アンジェリカの浮かべる優しい笑顔と差し伸べられた手を見る限り、自分達に危害を加える相手では無いと判断したのだろう。それでもアンジェリカから幼子を庇うように、少女が前へ一歩踏み出ると小さく震える声で言葉を放った。

「わたし、マリエラ……こっちが妹、の……ソフィア……」

「そう……マリエラとソフィアね？ 教えてくれて有難う。私はアンジェリカって言うの。友達はアンジェって呼ぶわ、二人にもそう呼んでもらえると嬉しいんだけど……」

「アンジェ？」

「ええ」

アンジェリカはマリエラと名乗った少女に愛称で呼ばれると、嬉しそくに何度も頷いた後は地面へと屈む。

再び二人へと手を伸ばすが、今度は警戒される事が無いと分かったのか……アンジェリカはそのままフケと垢が浮き、汚れた姉妹の髪を何の躊躇いもなく撫でた。

新しい一日を告げる朝の街は、少し離れた場所に居る人の話し声など馬車の音や様々な雑音によって掻き消される。ヴァルトの元を離れ、路地に座り込んで浮浪児の姉妹と話しているアンジェリカの声など今ではもう耳に入らない。

ただ……アンジェリカの笑顔につられ、暗かった少女達の表情が次第に明るなものへと変わってゆく様子だけはヴァルトがいる位置からでも充分伺う事はできた。

先程アンジェリカが浮かべていた表情は、彼女達を過去の自分と重ね合わせていたものだったのだろう。

あの時、アンジェリカがヴァルトに謝ったのは――過去を不用意に思い起こす愚かしさに気付き、迂闊にも他人の前で発露してしまった事に対してだったのかもしれない。とヴァルトは考えていた。

本来ならばあの時に諫め、過ぎ去ってしまった事を思い出す愚かしさを嘲笑してやればよかったのかもしれない。或いは、アンジェリカもそれを望んでいたのかもしれない。

アンジェリカとマリエラとソフィア。

今しがた知り合ったばかりにも関わらず、全くそれを感じさせない三人の姿。

それを遠い昔に見た光景と重ね、目を細めたまま眺めている自分に気付いているヴァルトが――過去を思い起こし自嘲していたアンジェリカに対し、何も言える筈が無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7490y/>

我が慟哭八、拳ト成リテ

2011年12月2日02時49分発行